さんけん新聞

発　行
ＮＰＯ法人
三段峡―太田川
流域研究会
（代表・本宮炎）

〒731－3813
広島県山県郡
安芸太田町
柴木 1734
☎090・
3421・3046

トチノキの生育・植生を調査

十五本が成長　周辺に多様な植物相

トチノキを活用した渓畔林再生事業の現地調査を十月八日と十八日、安芸太田町内の二カ所で実施した。四月に播種したトチノキの生育状況と周辺の植生を広大さんけん部が中心になって調べた。

生育の状況を調べた八日は、大崎壮巳理事と広島大学大学院で森林生態学を専攻する青柳仁士さんが十五本のトチノキの幹径や光環境を調べ、土壌を採取した。場所による生育条件を確かめるのが目的で、六月の調査から四本減っていた。

トチノキ周辺の植生を調べた十八日は、同部の大本武さんや竹内史さん、國井秀剛さんら五人が一個体ずつ植物を同定した。寺領地区ではヤマグワやアブラチャンを、段地区ではマタタビなど計七十四種の木本類と約六十種の草本類を確認した。

植生を調べる広大さんけん部員

青柳さんは「今回は生育状況・環境の定量評価をした。今後の継続調査で生存、成長状況から実生の生育に好ましい環境を明らかにできる可能性がある」と話していた。植物調査では針葉樹と広葉樹が生育する渓畔林の暗い環境では多種の植物が記録され、幅広い植物の生育域になっている実態を裏付けていた。来年は播種範囲を広げて生育の違いを比較する。

この事業は認定ＮＰＯ法人瀬戸内オリーブ基金（香川県）の助成を受けている。

倒木トチの年輪調査

11月30日のさんけん祭

栂崎の探勝路近くにあったトチの巨木が９月、根返りし力尽きた。樹齢数百年と言われていた老木は三段峡を何年間見続けたのか、11月30日（日）のさんけん祭で正確な年齢を確かめる。調査の後、倒木によって太陽光が差し込み、森が再生する「倒木更新」の講演会を開催する。　（写真：2019年9月撮影）

三段峡の歴史や活動を説明

EPOちゅうごく　地域循環共生圏事業

環境省が設置する中国環境パートナーシップオフィス（EPOちゅうごく・広島市）が主催する「地域循環共生圏づくり支援体制構築事業中国ブロック中間共有会」のオプションツアーが十月十五日、二十一人が参加して三段峡で開かれた。

小林久哉副理事長が三段峡の概要や歴史について解説し、二〇一七年の開峡百周年に向け、憲章制定を議論したのが契機となってさんけんが設立され、三段峡を野外博物館と位置付けて活動していると説明した。現在、休館中の三段峡ホテルの経営を引き継ぐ川本愛さんは、同ホテルとの関りを話し、地域の活性化につなげたいと抱負を語った。

広島国際学院中学生　ベスト山水画　撮影

広島国際学院中学校三年生四十一人が十月十七日、峡内でトレッキングと自然観察を楽しんだ。生徒は事前に絵本「モチモチの木」や山水画について学習し、課題提出に取り組んだ。昨年に続き二回目。

探勝路では学習内容を振り返りながら、「自分のベスト山水画ショット」をタブレットで撮影した。課題は昨年下見した同校の教諭らが、さんけんのガイドをヒントに組み立てた。

博物館の歴史学ぶ

自然史ネットが会合

「ひろしま自然史ネットワーク」の会合が十月二十二日、県内の自然史施設の担当者ら十七人が集まって庄原市立比和自然科学博物館で開かれ、井上嵩裕隊員が参加した。宮永卓宜学芸員が同館の歴史を紹介、秋山美文客員研究員は「比婆科学教育振興会」の活動が運営の礎になっていると解説した。参加者からは「自然と人との関りを次世代へつなぐ場づくりが大切」などの意見が多く出された。

一口メモ

▼熱き思い

開峡百周年の二〇一七年は安芸太田町主催で盛大に祝ったが、今年十月の名勝指定百周年は静かに迎えた。地元民が運動を盛り上げて勝ち取ったのはむしろ「名勝」の方だ。無名の地が開峡からわずか八年で達成したのには驚く。五三年に特別名勝の指定を受け、自然・文化的価値が高く評価された。先人たちの努力に感謝し、当時の熱き思いを引き継ぎたい。

セピア寫眞帖（36）

野田富示仁が昭和初期に撮影した旧芸北町西八幡原の蓬（よもぎ）旅館である。中央の戸袋には「三段峡保勝會案内所」と当て字で書かれた「御屋ど八幡村四茂樹」の看板が掛かっている。

八幡へバス便　旅館に三段峡案内看板

場所は八幡高原や臥龍山には近いが、三段峡の北端へは距離がある。名勝指定から間もないころで三段峡の名声の高さが窺える。

八幡村まで足を伸ばし、臥龍山への登山など広域観光をした探勝客もいたのだろう。プレートに「八幡行」と書かれた乗合自動車がそれを可能にしたのは言うまでもない。並ぶのは観光客と地元民だと思うが、時代の最先端の自動車と一緒に写りたかったのか、結果的に会社名などの詳細情報が隠れてしまった。

八幡は有数の豪雪地帯であり、奥の建物は合掌造りのような急傾斜になっている。土壁は竹を骨組みに使うが、寒冷地では竹が育たず、クリ材などの板壁になっているのも特徴である。樽床ダム堰堤近くの芸北民俗博物館で、当時の建築を見学できる。　（松尾俊孝）

八十（センチ）級のオオサンショウウオ　米国人研究者が歓声

三重県で開かれた「第二十回日本オオサンショウウオの会　名張大会」で活動報告をしたアメリカ人研究者四人が、通訳を務めた田口勇輝さんの薦めで十月二十三日、ＬＯＵＰＥを訪れ＝写真＝、長淵の下流でオオサンショウウオを観察した。八十センチサイズは同国では最大級で、悠々と動く姿に歓声を上げ、カメラを向けていた。この様子は十一月十二日午後六時四十五分台に放送される広島ホームテレビ「地球派宣言」で紹介される。